

2023年8月6日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ9「三位一体への招き」

詩編144：3～4、ローマ8：26～30

問26「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と唱える時、あなたは何を信じているのですか。

答 天と地とそこにあるすべてのものを無から創造され、それらを永遠の熟慮と摂理とによって今も保ち支配しておられる、わたしたちの主イエス・キリストの永遠の御父が、御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる、ということです。

近年、父なる神さまの「父」が問題になります。確かにジェンダーの問題等、神さまにそういう性の区別があることに抵抗を覚える方もいらっしゃるかもしれません。ですからあえて「父なる神さま」という呼びかけをしない人もおります。けれどもわたしはやはり「父なる神さま」と呼びかけるべきだと思います。教会が「父なる神さま」と祈るとき、神さまの父性、父である性質を考えているではありません。ましてや人間的な父親のイメージを重ね合わせているのでもありません。「父なる神さま」と呼びかけ祈るとき、その「父」とはどこまでもイエス・キリストの父を指しています。福音書を見ますと、イエスさまが父なる神さまに向かって「アッバ、父よ」と呼びかけるところがあります。また父なる神さまはイエスさまに対して「これはわたしの愛する子」（マタイ3：17）と呼ばれるところがあります。ここには三位一体の父と子の関係性が示されています。アウグスティヌスは三位一体を「愛」で表現しますが、まさに永遠の愛の交わりがそこにあります。

そして驚くべきことに、その三位一体の交わりの中にわたしたちは招かれています。ですから信仰問答は「御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる」と言います。本来、立ち入ることができない父なる神さまとその独り子イエス・キリストとの交わりの中に「キリストのゆえに」迎え入れられるのです。ですからわたしたちが「父なる神さま」と呼びかけるのは、キリストのゆえに、その罪を赦され、神の子とさせていただいた恵みのしるしに他なりません。それは三位一体の父と子の交わりの中に招かれた者だけに許されている特権なのです。「父」と呼ばないのはこの恵みを拒否しているのと同じです。これは神さまが父なのか、母なのか、性差があるかないとか、そういう次元の話をしているではありません。これは父と子と聖霊の三位一体の交わりの中に招かれていくという驚くべき救いの話なのです。

詩編144編に「主よ、人間とは何ものなのでしょう、あなたがこれに親しまれるとは。人の子とは何ものなのでしょう、あなたが思いやってくださいるとは。人間は息にも似たもの、彼の日々は消え去る影」（144：3～4）とあります。天地創造の初めから今に至るまでの悠久の歴史の中に身を置いたとき、一人の人間の存在がいかに小さく、弱く、儚い存在であるかお分かりでしょう。しかも罪を犯して、神さまに背き続けるわたしたちです。それゆえに影も形もなくなってしまうわたしたちに神さまはイエス・キリストを与えてくださいました。どうしてでしょう。「神は人を良いものに、また御自分にかたどって、すなわち、まことの義と聖において創造なさいました」（問6）神さまはそうにわたしたち人間をお造りになられたことを決してお忘れではないのです。それゆえにわたしたちを創造の目的に適うものに回復させようとイエス・キリストをお与えになり、永遠の熟慮と摂理とによって今もお保ち支配してくださいます。

今日は新約聖書でローマの信徒への手紙を読みました。そこには「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました」(29節)とあります。同じような表現がⅡコリントにもあります。「栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです」(3:18)とあります。パウロがこのことを強く意識していることが分かります。人間は罪ゆえに神のかたちを壊してしまいましたが、キリストのゆえにもう一度神のかたちを回復して、神の子として再創造されるのです。しかも御子と同じ姿に造り変えられるのですから、まさに三位一体の父と子の関係の中に迎え入れられるということでしょう。さらに今日のロマ書では「霊自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」(27節)とあります。わたしたちの回復、再創造のために父・子・聖霊なる三位一体の神さまが総動員で働かれるのです。その愛の交わりの中に招くためであります。

わたしはこの方により頼んでいますので、この方が体と魂に必要なものすべてをわたしに備えてくださること、また、たとえこの涙の谷間へ、いかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてくださることを、信じて疑わないのです。なぜならこの方は全能の神としてそのことがおできになるばかりか、真実な父としてそれを望んでもおられるからです。神さまはご自身のすべてを捧げて罪深いわたしたちを神の子としてくださいました。その救いのゆえに、この神さまの深い愛のゆえにわたしたちは心から神さまにより頼む、信頼する生き方が可能になります。「この方が体と魂に必要なもの全てをわたしに備えてくださる」と信じるのです。またどんな試練にあっても、すべてをわたしのために益としてくださることを信じて疑わない。これは子が親を完全に信頼している状態、三位一体の深い信頼の関係です。

この信仰問答を通して改めて人間はかけがえのない素晴らしい存在だと教えられます。それは信仰の光の中でこそ初めて見えてくることです。でもこの世ではそのことが曇らされてしまうでしょう。人間の存在が軽んじられています。人権が踏みにじられています。戦争があります。実は、人間の尊厳や個という考え方は三位一体の信仰によって形成されたと言われます。残念ながらこの日本の社会では人権や個の考え方はなかなか育ちません。個が尊重されず、全体主義の中に取り込まれてしまいます。このような世界だからこそ信仰が求められています。一匹の羊を探されるように、たった一人の人間のために、その御子をさえ惜しまずに与えてくださった神さまの恵みの中でこそ人間の尊厳は保たれるでしょう。そこに人間として健やかに生きる道があると教会は信じています。

天の父よ。罪深いわたしたちを御子キリストのゆえに神の子としてくださる、そして父よと呼びかけるほどに親しい愛の交わりの中に招いてくださる幸いを感謝いたします。どんなに悩みが深く、混沌とした世界でも、あなたが決して見捨てずに、この救いの中に招き続けておられることを忘れることがありませんように。主の御名によって祈ります。アーメン。